

# 森の中の犬ころ

小川未明

青空文庫



町まちのある酒屋さかやの小舎こやの中なかで、宿無やどなし犬いぬが子供こどもを産うみました。

「こんなところで、犬いぬが子こを産うみやがって困こまったな。」と、主しゅじ人は小言こごことをいいました。これも、小僧こぞうたちが、平常へいぜい小舎こやの中なかをきれいに片かたづけておかないからだ、小僧こぞうたちまでしかられたのであります。

「この畜ちくし生しょうのために、おれたちまでしかられるなんて、ばかばかしいこった。犬いぬの子こを河かわへ流ながしてきてしまえ。」と、小僧こぞうたちは話はなしをしました。

「そんな、かわいそうなことをするもんじやない。目めがあいたらどこかへ持もっていつて捨すてておいで。」と、かみさんがいいまし

た。

そのうちに、小犬<sup>こいぬ</sup>たちは、だんだん目<sup>め</sup>が見えるようになりまし  
た。そして、よちよちと、短<sup>みじ</sup>い、筆<sup>ふで</sup>先<sup>さき</sup>のような尾<sup>お</sup>をふりながら  
歩<sup>ある</sup>くようになりました。「どうか、もうすこし、子供<sup>こども</sup>たちが大<sup>おお</sup>き  
くなるまで、ここにおいてください。」と、あわれな母<sup>おや</sup>犬<sup>いぬ</sup>はも  
のをいわないかわりに、目<sup>め</sup>で小僧<sup>こそう</sup>さんたちに訴<sup>う</sup>えたのであります。  
けれどそれは許<sup>ゆる</sup>されませんでした。

「だれか、もらいてがあるといいんだがな。」

「警<sup>けい</sup>察<sup>さつ</sup>へつれていくと、一<sup>い</sup>びき三十<sup>さん</sup>銭<sup>せん</sup>になるぜ。君<sup>きみ</sup>つれていか  
ないか？」

「ばかにするな。晚<sup>ばん</sup>に、どこかへ、リヤカーに載<sup>の</sup>せて捨<sup>す</sup>ててき

てやろう。」と、小僧こぞうさんたちは、そんな話はなしをしていたのです。これを聞きいた、母犬おやいぬは、おどろきました。なぜなら、たとえばんせつそうに見みえる人間にんげんでも、そうしたことをやりかねないからです。

「私わたしも、はじめは、何なに不自由ふじゆうなく、かわいがられたものだ。それを、どういうわけか、いつからともなくきらわれて、私わたしは、ついに、おいてきぼりにされて、飼かい主ぬしは、どこへかいつてしまった。私わたしは、いまでも、その人ひとたちをなつかしく、慕したわしく思おもっているばかりでなく、ご恩おんを受うけたことを、けつして忘わすれはしない。けれど、こんなことがあつてから、人間にんげんを信しんじていいものかわからなくなつた……。」と、母犬おやいぬは考かんえました。

母犬は、だれにも、気づかれない間に、小犬たちをつれて、

そこからほど隔たった、ある森の中に引越してしまいました。

その森は、ある大きな屋敷の一部になっていたので、破れた

垣根からは、犬ばかりでなく、近所に住む人間の子供たちも、

ときどき、出入りをしました。秋になると、どんぐりの実が落ち

れば、また、くりの実なども落ちるのでありました。

母犬と小犬が、この森の中に入ったのは、まだ春のころで

ありました。人間の子供たちが、いたずらをしに、容易に近づ

かれないように、いばらや、竹のしげった一本の木の根のところ

に、穴を深く掘って、その中にすんだのであります。やつと、安

心をした母犬は、かわいい子供たちを、かわるがわるなめて

やりながら、

「ここなら、雨あめもあたらないし、また、だれからも追おいたてられ  
たり、じやまにされたりすることもないだろう。私わたしたちが人にんげん  
になつくのは心こころの底そこからだけれど、人にんげん間は気きまぐれで、捨すても  
すれば、また、ちよつとしたことでも、ひどくなぐつたりする。  
だから、人にんげん間かんをほんとうに信しんじてはならない。おまえたちは、  
ほかの犬いぬたちのように、りっぱな小舎こやにすむことができず、また、  
おいしいものを食たべられなくても、それをうらやましがってはな  
らない。そのかわりお母かあさんが、いつでもなにかさがしてきてあ  
げるから……。」と、母おや犬いぬは、よく小犬こいぬたちにいきかせまし  
た。

母おやいぬ犬は、自分じぶんが、空腹くうふくを感じかんているときでも、なにか食たべ物ものを見みつければ、すぐこどもに子供たちのいるところへ持もつてきました。また、途とちゆう中で、なにかもの音おとがすると、それが、小犬こいぬたちのいもりる森ほうの方からでなかつたかと、どこでも、立たち止どまって耳みみをすましたのです。その間あいだを、小犬こいぬたちは、穴あなの中なかから、首くびをのばして、母おやいぬ犬が、なにかうまいものを持もつてきてくれるのを、いまかいまかと待まっていました。そして、あまり、その帰かえりがおそいと、クンクンと、鼻はなをならし、また、低ひくく悲かなしげにないたのであります。

これをききつけて、あわれな母おやいぬ犬は、大急おおいそぎでもどりました。



「さあ、さあ、待たしてわるかった。今日はいままで歩いたけれど、なにも見つからなかったのだよ。私の乳をあげるから、これで、がまんをしておくれ。」と、自分のひもじさも、疲れもすべて、忘れて、三びきの小犬をふところに、母犬は抱いたのです。ある日のこと、母犬の留守の間に、酒屋の小僧がやってきて、一びきの小犬をさらってゆきました。

「いい犬の子があつたら、ほしいものだ。」と、頼んだ家がありましたので、そこへ持ってゆくつもりでありました。

母犬は、森の穴に帰ってみると、一びきの子供がいませんで、どこへいったらうと、心配しました。暗くなっても、まだ、小犬はもどってきませんでした。母犬は、きちがいのような

つて、あたりをさがしまわりました。とうとう夜じゆう、かなしい声をたててなきあかしたのです。その声は町の方まできこえてきました。

「かわいそうに、もし人間が、自分の子供がいなくなったらどんなだろう？」と、酒屋のかみさんは、思いました。

小僧さんも、またかわいそうに思ったのか、翌日、昨日さらつていった小犬を、もう一度森の中までつれてきて、「おいしいものをたべさして、かわいがってくださいるお家があるのだよ。」と、母犬に向かつてよくさとしました。すると、その意味がわかったとみえて、母犬は尾をふつて、もらわれてゆくわが子さびしそうに見送っていたのです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

※表題は底本では、「森《もり》の中《なか》の犬《いぬ》ころ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：藤井南

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 森の中の犬ころ

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>